抄　　録

低壓の廻轉性後眼球震盪に及ぼす影響 特に鼓膜穿孔耳に於ての觀察

矢　部　寛（海軍）

海軍軍醫會雜誌 32 卷 3 號 212 頁　昭和 18 年 3 月

低壓が廻轉後眼球震盪症に及ぼす影響が鼓膜所見の正常者と穿孔者とに於て如何なる差違を示すかに就き研究せり。

被檢者は 20—30 才男子（兵），廻轉試驗は Kobrak の微弱刺戟法にて 1 廻轉 6″，5 回轉 10′ 間隔にて 10—20 回反覆試驗を施行，後眼球震盪の數及持續時間を測定せり。但し頭位は 30° 前屈とす。

實驗成果 1）低壓下に於ける健康者の耳性眼球震盪値は半氣壓程度迄は低壓に伴ひ漸次增大す。2）鼓膜穿孔耳の低壓下に於ける眼震値の消長も亦略健耳と同樣の傾向を示せども，低壓に伴ひ眼震値の增大する程度は健耳に比して著しく輕度にして，鼓膜穿孔耳に於て 4000—5000 m 高度の眼震値が健耳の 2000—3000 m 程度なり。換言すれば鼓膜穿孔耳は低壓により刺戟せらるゝの度，健耳は比し著しく小なり。3）前項の成績より鼓膜穿孔耳の前庭器は低壓の影響を蒙ること健康耳に比し遙に尠にして，この事實は急激なる變化を伴ふ航空時に於て內耳平衡器より受くる混亂を或る程度迄避け得る結果となり得べく思考せらる。

（立野抄）

血清病豫防に關する新知見

小山芳輝（大邱醫專）

診療と經驗　7 號 8 冊 472（昭和 18 年 8 月）

著者はX線照射法により血清病發現を豫防し乃至は其病狀を輕減せしめんと思惟し，16歳以上13名，15歳以上 7 名に，深部又は中間X線約 200 r 前後を，血清注射後 4—5 日項，1乃至 2 回注射部位（上腿）に照射を試みたり。實驗例に關節痛を惹起せるもの 1 例もなく，唯一過性の輕微なる痛みを感ぜしもの 3 名に過ぎず，且特異の發疹，瘙痒も殆ど問題とならず。5 例に注射部位に輕度の瘙痒感を感じたるのみなり。斯くの如く血清病症狀は殆んど其の特異性を抑制せられたるが如き觀あり。「レ」線照射は個體，症狀，年齡，使用血清量，注射方法等諸種の條件を參考とし照射量，照射方法等を加減する要あり。X線照射が血清病發現抑制の機轉に關しては確實なる事は不明なれども，血清と個體組織の間に於ける生化學的反應により產生せらる，血清病發現毒素は注射直後より反應し，注射後 7 日—10 日前後に最高に達し，此の時產生せらるゝ毒物の量に依り血清病症狀を現し，或は潛伏狀態のまゝ過經するものあるが如く考慮せらる。從つて血清病の發現するに十分なる毒素を產生するに到らざる時期に，最も大量產生さるゝと思はるる注射部位に直接X線照射を行ふ時は，血清病誘發毒素の產生を抑制し，爲に血清病症狀を發現するに到らず，又症狀發現するも極めて輕微に經過せしめ得るものならんと考ふ。（小泊抄）

細網肉腫の二例

森　弘，佐藤　登

北越醫學會雜誌 58 年 9 號 775 頁

第 1 例は 62 歳の女子に見られたる左側口蓋扁桃腺に發生せる細網肉腫にして，照射療法卽「レ」線4530r ラヂウム 500 mgst 照射のみにて極めて良好に經過し 6 ヶ月後尙再發の徵認められず。第 2 例は右側軟口蓋を原發部位とする女子細網肉腫なるも後鼻咽腔部に腫瘍新生し，更に頭蓋內に侵入，末期には肝臟肥大，兩側腰部以下の完全麻痺，直腸膀胱麻痺，腹水等を來したるものにして，寧ろ細網肉腫症と云ふが適當なる例なり。血液所見は第 1 例に於て淋巴球增多症と中性核左方遷移を見，第 2 例に於ては淋巴球減少症と中性核左方遷移を見，2 例共經過の進むにつれてエオジン嗜好白血球の增加を認め白血球は兩者共著明なる增減なし。2 例共照射療法のみに依存せるに第 1 例は外觀上全く治癒，第 2 例は始め輕快せるも後「レ」線不感受性となり死亡せり。「レ」線照射の効果は其組織學的所見により感受性の異なる事に注意し又可及的早期に充分なる量を照射する事が必要と思はる。（黑澤抄）

Allergie 性中耳炎

山　田　喜　郎

診斷と治療，30 卷 3 號 250 頁（昭和 18 年 3 月）

第 1 例 30 歳女。父が喘息に罹患，子女二人共血管運動神經性鼻炎を有し，その 1 人は喘息を有す。患者は風邪により左耳痛，耳鳴，難聽を起す。第 2 例は 2 歳男兒，其兄は卵，肉により自家中毒を起す。患者は喘息を有し，氣管枝炎により兩側急性中耳炎を併發す兩側共に鼓膜は炎症性發赤少く，第 1 例は浮腫樣蒼白且つ菲薄にて透明度を有す。第 2 例は灰白色に肥厚す。